

福音セミナー

聖書を生きる、キリストを生きる(二)

——一年に一人をキリストへ導く、一年に一人にキリストを伝える——

2019年5月18～19日(御殿場YMCA東山荘)

キリスト直結 その人なりのポイントをつかむ パウロの自己紹介 キリストに由りて、の故に、
を通して 最後の切り札イエス 根源現実には既に天界でキリストと一緒 数珠繋ぎ 「十字架と聖
霊」がワンセット 聖書をカラフルにお化粧 御言を自己流に受けとる 「見えるもの」と「見え
ないもの」 生命の御霊の法 福音は得心させてくれる世界 人間は蒔いた種を刈り取る 寝ても
覚めても神護美 90歳まであと3年半

●キリスト直結

今日のタイトルは、

「1、聖書を生きる、キリストを生きる。」

「2、伝道…一年に一人をキリストへ導く、一年に一人にキリストを伝える」

です。こういうタイトルを掲げまして、皆さん、それぞれにどう感じられたか。私は逆に
皆さんにお尋ねしたいと思うのは、

「これ以外に何があるんですか？」

と聞きたい。我々キリストに救われ、キリストに導かれて、残りの人生の長い人もいれば
短い方もいらつしやる。若い方はまだまだある。今や、私がいちばん最年長ですね。100歳
までいこうとしても、あと14年しかありません。しかも、それは約束されているわけでは
ありません。いづどこで何があるかと、別に不思議ではない。そういう終末というものに
直面している。福音というのは終末の迫りの中で語られている。明日も、その次の日も、
未来永劫にこの地上は延々と果てしなく続いていく、天地は続いていく、という前提では
語られていない。

「時は満ちた、神の国は近づいた。悔改めて、心を翻して、この福音を信ぜ

よ」

と。「福音」というのは、

「私(キリスト)を受けとれ」

と、そういうふうにはキリストは迫ってこられた。それがキリストの伝道の第一声なんです。
その伝道の第一声は今も響いていると私は思う。

そういうキリストが私たちにどのような生き方を願っていらつしやるのか。人間の側か
ら見るのではない。神・キリストの側から何を願っていらつしやるか、何を望んでいらつ
しやるか。人間の側つまり地の側、地上の側から向こうを見るのではなくて、天の側から、



神さまの方からこちらをどう見ていらっしやるかと。そういうふうに関点を移し変えていただきたい。福音書のキリストの言葉も、なさっていることも全部、その観点から受けとってほしい。

それをヘタに受けとると、御利益ごりやくになつてしまいます。そうではなくて、

「たとえ天地は滅びても、私の言葉は滅びない」

「天地は過ぎゆかん。されど我が言は過ぎ行くことなし」

「見よ、我は今日も明日もその次の日も進み行くなり」

とか、盛んなるキリストです。そういうキリストが、しかも、二千年前でありながら、今もありありと聖霊のキリストとなつて、我々の中に宿つてくださる。それがヨハネ伝12章以下で弟子たちに語られた約束なんです。

聖書を漫然と読むのではない。やはり、その中のポイントをしつかり把つかむような読み方をする。つまり、お一人お一人が自分流の聖書の読み方をする。そういうふうな読み方を、取っ組み方をなさつていただきたい。これはずつと私が願っていることです。

「誰々先生がこう言つたからこうだ」

とか、参考になさるのはいい。けれども、主体はどこまでも皆さんお一人お一人です。皆さんお一人お一人の主は、キリストおひとりなんです。いかなる先生といえども、それは媒介者にすぎない。キリスト直結です。これは小池辰雄先生がいつも仰いました。

「私はカトリックでもプロテスタントでもありません。キリスト直結です」

と、ハッキリ言われました。私はそのラインで、キリスト直結。皆さんもキリスト直結。キリストが皆さんを捕まえて、皆さんを鍛えあげて、皆さんをキリストの御意みこころにかなう証人あかしびとに仕立て上げようとなさっている。それに逆らうことを不信仰といえます。それに

「はい、どうぞ、御意みこころがなりますように」

と言うのが信仰なんです。これはマリヤさんが、受胎告知があつた時に、

「私は処女おとめで、男の人を知りません。けれども、あなたの御言みことばですから、私は

それをお受けします」

と、あそこで言われました。あの気持ちなんです。あのルカ伝の受胎告知。それから、石女うますめといわれていたエリサベツが子どもを宿して、それがもう六か月になつている。片一方ではマリヤさんは、処女であるのに、男の人を知らないのに、おなかがふくらんでくる。神さまの御業みわざとはいえ、世間体からしたら、これは姦通の女としか考えられないでしょ。その重荷に耐えかねて、エリサベツを訪ねていかれたと私は思う。マリヤが、「こんにちは」と挨拶したら、その声でエリサベツの胎の中の子ヨハネが躍つたという。それで二人とも聖霊に満たされて讚美をうたいました。これがルカ伝のところに出てきてます。

ところが、その生まれた幼児おさなごをいだいたマリヤさんが夫のヨセフと一緒に宮参りをした時に、シメオン老人がつかつかと近づいてきて、



「剣があなたの胸を刺し貫きますよ」
という不吉な予言をします。

「言い逆らいを受ける徴として、この子は定められています。あなたも剣で胸を刺し貫かれますよ」

と。そういう星のもとに生まれてきたイエスキマです。そういう方を私たちは救い主としていただいている。

そういうことから思いますと、我々は自分の運命環境をゴチャゴチャ言っている場合ではない。イエスを知らない方は、いろいろ自分についてゴチャゴチャ文句を言って、

「自分の運命はついてない。あの人はどうだ、この人はどうだ。それにひきかえ私は…」

なんて、普通の人は言います。我々はちがう。我々は全く別人種です。

「ひと新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず」

とキリストは言われた。

だいたい、福音書を読んでまして、ヨハネ伝が特に著しいですけども、キリストが言っておられることはみなこの世の次元のものではない。一皮むけた、新しく生まれた、霊なる人に対してキリストは語りかけている。それを聞こうと思つたら、こつちも霊なる人に生まれ変わらなければ聞けない。そういう非常に初歩的なことです。これがわからない人が多いんですね、クリスチャンといえども。

でも、私たちは、どういうわけか、そういうった世界に導かれおられます。小池先生が道をつけてくださっている。やはり、小池先生が言われたいちばん大事なことは、「十字架・聖霊」です。十字架を包むように聖霊がある。十字架と聖霊。先生の仰つていることはこれに尽きる。十字架・聖霊、これが一切です。もう十字架・聖霊の前に小池はぶっ飛んでいるから、「無者」と言われる。もしも先生の弟子たちが、「小池、小池」と担ぎだしたら、先生は怒りますよ。「キリストに直結しろ。私は媒介をしたただけだ」
と。今もそう叫びつづけておられると思う。

●その人なりのポイントをつかむ

こういうセミナーというのは、講師の先生が一方的に語りかけるのではなくて、むしろ皆さんがそれぞれの賜ったものを持ち寄つて、そして、神讚美、キリスト讚美して、お互いがお互いを強めあう。そういう集いだと私は思っています。さきほど既に準備の会の中で、皆さんのいろんな思い、このセミナーにかける思い、そういったことを告白してください。

まあ、前置きはそのくらいにしておきまして、この「聖書を生きる、キリストを生きる」と言いますが、やはり、



「聖書をどんなふう生きるんですか、キリストを生きるというのはどういうこと
なんですか？」

と。そうでしょ。簡単に「聖書を生きたる、キリストを生きたる」と言いましたも、

「具体的にどういうことなんですか。日常生活的にあなたはどんなふう「聖書を生きたる、キリストを生きたる」をやっているんですか。それを聞かしてくださいなね」

ということになってくると思う。

「聖書を生きたる、キリストを生きたる」

これがハッキリ確立して初めて次の、

「伝道…一年に一人をキリストへ導く、一年に一人にキリストを伝える」

が現実化する。それがハッキリしていない人がいきなり、

「キリストへ導く、キリストを伝える」

と言ってみたって、それはあまり説得力がないと私は思う。

聖書の中味を別な言葉でいうと、「見えるもの」と「見えないもの」ということ。我々は、見えるものはしっかり見ているんです、いつも。

「ああ、自然は美しい。今日は嵐でお天気がわるい」

とか、

「ああ、この人は顔色がわるいな」

とか。全部、見えるものを見ている。それも大事なんです。けれども、聖書の世界は、見えるものではなくて、見えないものに目をそそぐ。そう言っているでしょ、コリント書で。

「我々は、見えるものではなくて、見えないものに目をそそぐ。見えるものは

一時的であり、見えないものは永遠に続くからである」（コリント後4・18）

と。コリント後書4章16節からです。皆さん、聖書を読むときにやはりそれぞれに、

「私の聖書はこれだ」

という、そういう聖書の読み方をして、

「私はこういうところに力点を置いて読んでいます」

とか。一から終わりまでのんびんだらりと満遍なく読むのではなくて、ポイント、ポイントをしっかり掴む。その人なりのポイントがあると思う。別な言葉でいうと十八番おはこです、

「私にとって聖書の中で特に大事なものはこことここです」

と、そういうものもしっかり自分でつかんで、そしてまた、人に語る時にも、そういうことを語る。ということは、自分を告白することになる。

「私が悩んでいた時に、この言葉で救われた。この言葉が私の導きの星でした」

と、そういうものがきつと皆さんあると思う。私にもありすぎて困るんですけれども。ひとつはこのコリント後書4章の全体が素晴らしいところです。



皆さん、キリストを告白して、相手にされないときに、

「ああ、ちゃんとパウロが言ってくれているな」

と、そういうふうな思ってください。このコリント後書4章3節に、

「³もし我らの福音おわれ居らば、**亡ぶる者に覆われおるなり**。

あなたのせいではない。

「**亡ぶる者にとつては、福音は覆われているんだ**」

とハッキリ書いてある。

⁴この世の神は

「この世の神」とは、富みとかエゴです。自己中心的な己を追求する神。

此等の不信者の心を暗まして、

「不信者」というのはキリストを信じない人たち。キリストを軽蔑する人たち、そういう人たちの心をくらまして、

神の像なるキリストの栄光の福音の光を照らさざらしめたり。

神のみ姿、見えない神を見えるかたちで顕してくれた、そういうキリストさま、イエスさまに輝いている栄光を隠しているんだと。不信者の心をくらまして、神のかたちであるキリストの栄光の福音の光を照らさないように、くらましている。

あなた方のせいではない。神を拒絶、キリストを拒絶している人たちの自己責任だと。そういうふうにはっきり書いてあるから、皆さん、失望落胆することは何もない。

そして、我らは自分のことを伝えない。

⁵我らは己の事を宣べず、ただキリスト・イエスの主たる事と、

私にとつての主はキリストさまですと。それから今度は、自分は仕える人間だと。これはあのルターの「クリスチャンの自由」の二つの命題、

「クリスチャンというのは誰にも従属しない王である」

それから、

「万人に仕える僕である」

と、この二つの命題をあの「クリスチャンの自由」という小冊子の中で言っている。それがちやんとここにもありますね。

ただキリスト・イエスの主たる事と、我らがイエスのために汝らの僕たる事を宣ぶ。⁶光、暗より照り出でよと宣いし神は、イエス・キリストの顔に

ある神の栄光を知る知識を輝かしめんために、我らの心を照し給えるなり。

私たちの内側を照らしてください。

⁷我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり」（コリント後4：3～7）

これは自分のことを書いてくれていると、皆さん、お思いになりませんか。私は、



「新約聖書は私の身分証明書です」

と言っている。イエスは何と仰ったか。

「聖書は我につきて証するものなり」

と言った。あのときの「聖書」というのは旧約聖書でしょ。ヨハネ伝の中に出てきます。今度は皆さんお一人お一人は——自己紹介するときにはなかなか大変ですから——

「聖書は私の身分証明書です」

と言う。まあそのくらいの気持ちになっていただければ、ありがたいなと思います。

●パウロの自己紹介

余談ですけれども、パウロの手紙では必ず自己紹介をやっている。たとえば、コリント前書では、

「1神の御意により召されてイエス・キリストの使徒となれるパウロ及び兄弟
ソステネ、2書をコリントに在る神の教会、即ちいづれの処にありても、我
らの主、ただに我等のみならず彼らの主なるイエス・キリストの名を呼び求
むる者とともに、使徒となるべき召を蒙り、キリスト・イエスに在りて潔め
られたる汝らに贈る。」（コリント前1：1～2）

長いね、自分のことと相手がたの両方を言っている。「神の御意により召されてイエス・キリストの使徒となれるパウロ」という。

ローマ書では、自己紹介に注釈がついている。

「1キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選り別た
れたるパウロ

ここまでがいい。ここで終わってればいい。でも、これだけではローマのあなた方にはわからんだろうと。福音とは何ぞやと、自己紹介の中でも注釈している。

2この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預じめ御子に就きて約し
給いしものなり。3御子は肉によれば、ダビデの裔より生れ、4潔き霊によれば、
死人の復活により大能をもて神の子と定められ給えり、即ち我らの主イエス・
キリストなり。5我等その御名の為にもろもろの国人を信仰に従順ならしめ
んとて、彼より恩恵と使徒の職とを受けたり。6汝等もその中にありてイエス・
キリストの有とならん為に召されたるなり。」（ローマ1：1～6）

ここまでは、自分と相手に対する自己紹介の言葉です。このように語らざるをえないというパウロの気持ちがあるので。皆さんがもし人々の前で自己紹介するとしたら、どんなふうに自己紹介なさいますかね。私だったら、

「1956年の夏、イエス・キリストに由りて悩みより解決され、キリスト信徒となり、その後3年たちて小池辰雄に出会い、また福音の広さ深さ高さのいかばか



りなるかを教えられ、そして宣教師に捨てられ、独立の道を歩みし僕、奥田昌道。書をどこどこにある汝らに贈る」

なんて、そんなふうになるかな。やはり、パウロは自己紹介するときには、「キリストの恵みにより使徒とされた。自分で立候補したのではない」

という。自分は逆らっていた、反逆していた。そんな自分をキリストは赦して、しかも、一番弟子以上の弟子にしてお用いくださったと。即ち異邦人伝道です。ペテロたちはエルサレムを中心とした、ユダヤ人を相手とする伝道。パウロは異邦人に対する伝道。パウロは学問もあるし、小アジア、ギリシアの方の事情にも精通しているということで、パウロを選ばれた。

コリント後書ではどうでしょう。これも簡単ですね。

「^{みこころ}神の御意によりてイエス・キリストの使徒となれるパウロ及び兄弟テモテ」

（コリント後1：1）

とあります。

ガラテヤ書はすごいですよ。こんな自己紹介をしてみたいね。

「^{あち}人よりに非ず、^よ人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、²及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教会に贈る。³願わくは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。⁴主は我らの父なる神の御意に随いて、我らを今の悪しき世より救い出さんとて、⁵己が身を我らの罪のために与えたまえり。願わくは栄光、世々限りなく神にあらん事を、アアメン。」（ガラテヤ1：1～5）

もう、自己紹介が祈りになってしまっている。エペソ書は簡単ですね。

「¹神の御意によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書をエペソに居る聖徒、キリストに在りて忠実なる者に贈る。」（エペソ1：1）

と言ってます。

●キリストに由りて、の故に通して

自己紹介はそのくらいにして、もうひとつ申し上げたいことは、特にエペソ書はそうだと思いますが、見える現実ではないんです。見えない、天において既に成っている現実、それを小池先生は「根源現実」と言われました。根源現実をここで宣言していると、私はそう受け取りました。

「³讚むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて



この「由りて」というのは、「由来」の「由」という字が書いてあるでしょ。これが実に含蓄の深い言葉です。非常に内容が豊かですよ、この「由来する」というのは。理由や原因も表すし、通路や「ここを通ってこうなりました」という経路も表します。そういう、キリストに由りて、あるいはキリストの故に、キリストを通して、

霊のもろもろの祝福をもて天の処にて我らを祝し、
 「天の処」ですよ、この地上ではない。天の次元において我らを祝す。パウロはこのあとで、「汝らを」といって、自分と汝らを区別しているけれども、私はそんな区別はいらんと思っています。もう一緒だと思う。ここは「我らを」と言っているでしょ。天の処にて我らを祝し、

4 御前にて潔く暇なからしめん為に、世の創の前より我等をキリストの中に
 選ぶ、

ここにも「我等を」と言っている。

5 御意のままにイエス・キリストに由り
 このお方を通して、このお方の故に、このお方のおかげをもって、

愛をもて己が子となさんことを定め給えり。6 是の愛し給う者によりて
 我らに賜いたる恩恵の栄光に誉あらん為なり。7 我らは彼にありて恩恵の富
 に随い、

「恩恵の富」とは、別の言い方をしたら、「豊かなる恩恵」ということ。富みとはあふれるばかりの富みという、あふれるばかりの恵みにしたがって、

その血に

十字架の血に、

頼りて贖罪、すなわち罪の赦を得たり。8 神は我らに諸般の知恵と聡明とを
 与えてその恩恵を充しめ、9 御意の奥義を御意のままに示し給えり。10 即ち時
 満ちて経綸にしたがい、天に在るもの地にあるものを、悉くキリストに在
 りて一つに帰せしめ給う。これ自ら定め給いし所なり。11 我らは、凡ての事
 を御意の思慮のままに行いたもう者の御旨によりて預じめ定められ、キリ
 ストに在りて神の産業とせられたり。

だから、このエペソ書ではもう神さまのプログラムに始めから我々の救いは組み込まれて
 いた。それが時が満ちて現実化したという感じなんです。

12 これ夙くよりキリストに希望を置きし我らが、神の栄光の誉とならん為な
 り。

そして、「汝等も」と、ここで初めてエペソの人たちに対して、「汝等」をもってきた。でも、
 「我ら」と「汝ら」をそんなに区別することはないと私は思っている。

13 汝等もキリストに在りて、真の言すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信



じて約束の聖霊にて印せられたり。」（エペソ1：3～13）

ちゃんと聖霊というスタンプが押されている。焼き印がされている。これが救いの保証だと。「洗礼をうけました。何々をしました」と、そんなのではない。聖霊の焼き印が押されていること。これはガラテヤ書のいちばん最後をみてください。ガラテヤ書は戦いの書でしよ。パウロの伝えた純福音を、「それだけでは足りない。プラス・アルファが要る」と言った者どもと戦った戦闘の書です。その最後に彼は何と言っているか。

「17今よりのち誰も我を煩わすな、

もうゴチャゴチャ言わんでくれと。

我はイエスの印を身に佩びたるなり。」（ガラテヤ6：17）

イエス・キリストの焼き印を押されてしまっているという。だから、パウロが「聖霊」と言うときには、観念ではない。身体の中にしみこんでいる。入れ墨とかいうのがありませぬ——あまりいいものではないが——それから焼き印、これは大変でしょうね、焼き印を押されるといふことは。そのくらいにパウロにとっては、キリストという方は身体の中にしみ通っている。それで、

「福音のみ、キリストのみ、信仰のみ」

と言つて戦いました。その「信仰のみ」は別の言葉でいうと、

「聖霊がすべてである」

ということでもある。つまり、人間の側は何もない。始めっから、ご計画も、その成就も、その後のリードも、一切は神・キリストから出ている。それに全く委ねよと。おのが計らい、おのが知恵、そんなものは一切要らない。徹底した神信頼、キリスト中心なんです。それがエペソ書のここに、

「もう世の創られる初めからそういうふうが決まっていた」

と書いてあるでしょ。

「御旨によりて預じめ定められ、キリストに在りて神の産業とせられたり。

12 夙よりキリストに希望を置きし我らが、神の栄光の誉とならん為なり。」（エ

ペソ1：11～12）

という。

●最後の切り札イエス

イザヤ書の中にも出てきます。

「この民はわが誉れを述べしめんために我おのれのために創れるなり」

という言葉が出てくる。あれも素晴らしい言葉です。神さまは自分ひとりで自己満足でいたくないんですよ。やはり、子どもをつくりたい。しかも、子どもはひとえに神を讃えるような子ども。神と一つ心で喜びを共にする相手がほしい。たぶん初めは、キリストがそ



ういうお方だったんでしようけれども。ところが、やはり人間をお創りになって、人間どもが困らないように、キリストをお遣わしになった。というのはそれまでは、人間は逆らつてばかりだから、最後に切り札としてイエスを遣わした。そうしたら、

「こいつを殺してしまえば、天下はおれたちのものだ」

と言って、キリストをなぶりものにした。これが人間の歴史でしょ。それをキリストは、「彼らを赦してやってください。彼らは自分のやっていることがわからないの

です」（ルカ23・34）

という、あの執り成しの祈りを十字架の上でなさってくださいました。世の人たちはその事態を本気で考えてほしい。そんなことをやってくれたひとが天上天下どこにいるか。お釈迦さんだつてそんなことはやってないよと、私はそう言いたい。そこを外してどこに救いがあるかと。まあ私はそう思っている。

「13汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。14これは我らが受くべき嗣業の保証にして、神に属けるものの贖われ、かつ神の栄光に誉あらん為なり。」

全部、私たちの霊的現実をエペソ書はあらかじめ——我々から見たら、あらかじめです——そうやってちゃんとやっててくれている。そして、パウロの祈りも、

15この故に我も汝らが主イエスに対する信仰

「信仰・希望・愛」が出てくるんですよ、ここに。

信仰と凡ての聖徒に対する愛とを聞き、16絶えず汝らのために感謝し、わが祈のうちに汝らを憶え、17我らの主イエス・キリストの神、栄光の父、なんじらに智慧と黙示との霊を与えて、神を知らしめ、18汝らの心の眼を明かにし、神の召にかかわる望と、

ここに「希望」が出てきました。だから、「信仰・愛・希望」と、ちゃんとここで出てきている。

聖徒にある神の嗣業の栄光の富と、19神の大能の勢威の活動によりて信する我らに対する能力の極めて大なることを知らしめ給わんことを願う。20神はその大能をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦えらせ、天の所にて己の右に坐せしめ、」（エペソ1・13～20）

神の大能というのはキリストを復活させたあの大神だ。ですから、皆さんも、つらいところを通つてこられたり、いろんなことがあります。どんなことがあつても、キリスト以上ではない。キリストが負われた十字架以上ではない。そのことを思つてほしい。そして、その方がどう言つてくださるか。

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ。我なんじらを休ません。」

と言つてくださった。誰よりも負い難い重荷を負つて潰れたキリストが我々にむかつて、



誰でも重荷を負っている者は私のところに来なさい。私が休ませてあげる。わが荷は負いやすく、わが荷は軽ければなり」（マタイ11：28～29）

と。ああいう言葉にふれたら、涙が出ますわ。ルターは詩篇46篇で、

「神はわれらの避所さげどころまた力なり。悩める時のいと近き助けなり」

と叫んでいます。小池辰雄はそれについてどう言ったか。

「神はわれらの避所、つまり逃げ込むんだ。避所というのは、そこへ逃げていく。また力なり、とはどういうことか。避所に逃げ込んだら、力をいただく。そして力に満ちあふれて、そこから出陣していく。逃げる時は、クタクタになつて逃げ込んだ。けれども、逃げ込んで力をいただいたら、今度は勇者となつて飛び出していく。これが詩篇46篇だ」

と言われた。ああいう捉まえ方は凄いと感動しました。

「神はわれらの避所さげどころまた力なり。悩める時のいと近き助けなり。さればたと

い地はかわり山は海の中央もなかに移るとも我らはおそれじ。」（詩篇46：1～2）

という言葉が続きます。

●根源現実には既に天界でキリストと一緒

そして、今のエペソ書の第2章も我々の現実をみごとに言い当てています。

「あなた方はキリストにくるまではさんざんな生活を送っていただろ」

と。異邦人ですから。

「―汝きみら前まへには咎とがと罪つみとによりて死にたる者にして、

それは生きてましたよ。けれども、霊は死んでいた。魂は死んでいた。心も死んでいた。

2 この世の習慣ならわしに従い、空中の権とを執つかさる宰さ、すなわち不従順の子らの中に今

なお働く霊の宰さにしたがいて歩めり。

これはサタンです。サタンとその子分に振り回されていたではないか。あんた方はそうだった。そして、「我等もまた」と言っている。ここはパウロは自分だけは特別だとは言わなかった。

3 我等もみな前には彼らの中うちにおり、肉の慾よくに従いて日をおくり肉と心との

欲ほする随まをなし、他の者のごとく生れながらの怒いかりの子なりき。

「怒りの子」とは何ですか。私は、これは二重の意味があると思う。神さまから見て、審判の対象。神さまから見たら、神の怒りが臨まざるをえないという、そういう存在。それから自分自身がイライラして絶えず怒ってばかりいる。イライラしている時は、何かにつけて人に当たる。当たり散らす。外面そとづらのいい人は、外で無理しているから家の中に入ってきたら当たり散らす。幸田露伴が「娘に与える手紙」の中で言っていました。「外面のいいやつは気をつけろ。そんなやつに限って家の中では暴君だから」と。



4 されど神は憐憫に富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、⁵ 咎によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りて

これも「由りて」、由来です、キリストの故に、キリストの恵みの御業によって、キリストと共に活かし（汝らの救われしは恩恵によれり）⁶ 共に甦えらせ、共に天の処に坐せしめ給えり。

皆さんは甦っているんです。パウロさんによれば、皆さんはキリストが甦られた時に既に天のところにちゃんと霊は引き上げられている。現実はこの世を生きています。でも、

「あなたの根源現実には既に天界でキリストと一緒に王者になっているんだよ」と。それを受けとりましょうよ。成るべき現実、来たるべき現実に向こうでもう出来上がっている。地上の現実はその方向に向かって歩いている。キリストは、地上では私たちが聖霊となつて導いてくださる。天上では、光輝くお姿の主として輝いていてくださる。あの4時間天国に行っていたインディアン⁷の女性は、

「もうキリストに出会つたら、とろけそうだった」

と書いている（ベティ・バックスター著『死んで私が体験したこと』—主の光に抱かれた至福の4時間—）。

「もう地上へは帰りたくない、だだをこねたと
言つてますよ。あれは本当だなと思いますね。」

8 汝らは恩恵により、信仰によりて救われたり、是おのれに由るにあらず、神の賜物なり。⁹ 行為に由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり。

そして次に我々の存在目的がちゃんと書いてある。

10 我らは神に造られたる者にして、神の預じめ備え給いし善き業に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり。」（エペソ2・1～10）

我々は新しい創造物、新創造物で、これが我々の誇りです。生の我々がどんなにでき損ないであつても、キリストの十字架によつて旧い我々はすっかり十字架につけられた。

「20 我キリストと偕に十字架につけられたり。最早、われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。²¹ 今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり」（ガラテヤ2・20～21）

と。これが我々の告白です。そういうものを日々の生活の中で、

「それ以外に私はありません」
という生き方をする。これが私の、「聖書を生きる、キリストを生きる」という中味なんです。繰り返して言いますと、

「これ以外に何があるんですか？ これ以外の生き方が皆さんにあるんですか？」
と言いたい。「聖書を生きる、キリストを生きる」それ以外の生き方があるか。我々のかつての自分たちは、エペソ書に言っているように、肉なる我々は自己を求め、己が栄達を求め、



出世を求め、あるいは幸福を求めるといふ、全部、自己から出発している。求めはすべて自己のためなんです。ところが、十字架で死んだ我々は、我がために己が身を捨て給いしこのお方の御意だけが基本である。それ以外はない。現実にはいろんな欲望があっても、そんなものは放っておく。本当の新しく生まれた我というのは、

「キリストの中に新たに創られたるなり。古きは過ぎ去った、視よ、一切は新しくなりたり」（コリント後5・17）

とあります。すべてその死生の転換、これを日々に味わっていくくらいの気持ちで生きていかないと、過去に流されやすいです、地上におきましては。天上に行つてしまえば、そういうことは一切ないと思う。地上はあくまで戦いですよ。キリストは言われました、

「我に従いきたらんと思わば、日々おのれを捨て、おのが十字架を負いて我に従え」（マタイ16・24）

と仰つた。決して、なま易しいことをキリストは約束しておられない。

「己を救わんと思ふ者は己が生命を失ひ。わが為、福音の為に己を捨てる者は永遠の生命を得る」（マタイ16・25）

とか、

「一粒の麦、地に落ちて死なずばただ一つにてあらん。死なば、多くの果を結ぶべし」（ヨハネ12・24）

とか。すべてキリストが言つておられることは、

「もう地上の生命は捨ててかかれ」

と。そういうことを我々に要求しておられる。それは生の肉なる人間はできないです、そのままでは。そしたら、何がそうさせてくれるのか。小池先生は、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」（マタイ5・3）

と。キリストは霊が貧しかった。霊が空っぽだった。そうすると、神さまという天国が百分に入つてきた。だから、「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」とは、

「私は霊がすっかり貧しいから、神さまという天国が、百分私に充滿している。こんな幸いなることはないんだよ」

と、これはキリストの自己告白だと言われた。ところが、小池辰雄は貧しくなれない、無になれない。イエスキさまは自ずと自然にゼロ、無になっていた。だから、天国、神さまという百分が宿つた。だから、

「ゼロ＝無限大」

という。それが自ずとそこに成就していた。ところが、小池辰雄はできない。それで苦しんだ。そうしたときに響いてきたのは、

「幸いなるかな、わが十字架において既に霊貧しくされている辰雄よ、聖霊の我、復活の我、なんじの中にあり」



と響いてきた。畳みの上に平伏したと、そういうふうにご告白しておられる。自分で無になるのではない。自分で自分を捨てられない。それが罪でしょ。

「それを私（キリスト）がもう片づけた」という、完了なんです。

「できあがった。もう終わっているよ」と。ところが終わっているということを受けとらない人が多いんです、クリスチャンは。

「まだ私はこんなんです、まだこんなんです」なんて。いつになったら、そうなるんですか。新郎なるキリストは、

「待つておられませんわ。待つていたらお爺ちゃんになってしまう」

と、そう言うておられますよ。およそ自己努力ではない。すべては賜物たまものである。小池先生は繰り返し晩年に言われました。

「無は賜るたまわ。自分で無になるのではない。賜りたる無です。何でも賜るんです」と。もう最後は、

「私はキリストを信じてなんかいません、ただ圧倒されています」と言われました。信じるとか信じないとか、そんな世界を突き抜けて、

「もうキリストに圧倒されています」と言われた。それは、

「我生く、されど我にあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」

というパウロの告白と中味は同じなんです、表現はちがうだけで。キリストはそういう世界に私たちを導こうとなさっていると思います。

コロサイ書の3章に私たちの霊的現実が書かれています。

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼処かしこに在りて神の右に坐し給うなり。」

あなた方はもう既にキリストと一緒に甦らされたのだろ。だったら、天の次元を求めるのが当たり前だよ。なぜなら、霊なるキリスト、復活のキリストはあそこにいらっしやるのだからと。

2 汝ら上にあるものを念おもい、地に在るものを念おもうな、

だから、あなた方は天にあるものを、天上のものを思うのは当然だ。地にあるものなんかもう思わないねと。「念おもうな」ではなく、「思わないね、当たり前だよ」と受けとってください。当然そうなんだよと。なぜならば、

3 汝らは死にたる者にして、

あなた方は死んだ者だ、とハッキリ書いてある。

其の生命いのちはキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。

あなた方の生命はキリストと一緒に神さまの中に隠されてある。見えないものです。見え



るものではなく、見えないものです。あなた方の本当の生命はキリストと一緒に神さまの中に隠されてある。そして、

4 我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに

現れん。」（コロサイ3・1～4）

私たちの生命は——これはパウロが、あなた方もパウロも一緒だという意味で——霊界のキリストが現れてくださるとき、あなた方もそのお方と一緒に栄光のうちに現れる。

これが我々の将来像なんです。こういうものを現実として生きるというのが、「聖書を生きる、キリストを生きる」という、私の言う中味なんです。日々そのような現実の中に踏み出していくということ。それをやって欲しい。

●数珠繋ぎ

それからついでにパウロの言葉を引きますと、コリント前書1章18節から。

聖書をお読みになるとときには、こういうふうには有機的に関連付けて、これに関してはどこどこが繋がっている。数珠繋ぎに繋がっている——盆踊りなんかでもよく提灯（ちようちん）が繋がっていますね、舞台の上をとり囲んでいる提灯が繋がっているでしょ、そういう感じで——聖書の言葉も全部つながっているんですよ、数珠繋ぎに。それを全部つないで総合的に受けとつていく。そういう受けとり方をしてください。もちろん、相手はギリシア人であることもあるし、異邦人であることもあるし、既に信者になつている人もある。相手によってパウロは語り方がちがいます。けれども、非常に共通性がありますから。

このコリント前書の1章18節、我々の根底はここから来ている。

「¹⁸それ十字架の言はば^{ことば}ぶる者には愚なれど、救わるる我らには神の能力なり」

（コリント前1・18）

別な言葉でいうと、

「十字架をバカにしているやつは滅びるよ」

と、こういうふう読み替えてください。

「十字架を蹴飛ばしている傲慢なやつは滅びるよ。でも、私たちにとっては十字架は救いなんだ。イエスキさまによって救われた私たちには、十字架はどこまでも救いの土台である。そして、そこから神さまの力が流れてくる。これ抜きにしては我々のクリスチャン人生はありえない」

と。だから、「聖書を生きる、キリストを生きる」という土台は、この十字架の贖いなんです。その十字架で旧い私たちは全部もう消えている。

「我れ主と共に十字架せられたり。もはや、我れ生くるにあらず」

とはそういうことですよ。生（なま）の人間は生きていくかもしれない。でも、根源的にはもう既にあなた方は、さつき



「死にたる者にして、あなた方の生命はキリストの中に隠されてある」（コロサ
イ3・3）

とありましたように、もう十字架で、キリストと一緒に十字架につけられて死んでいます。そしたら、十字架で私たちは地獄へ行つたのか。とんでもない。これは我々を天国へ連れて行ってくれる救いの門である。ヨハネ伝10章に「羊の門」というのがある。あの羊の門に十字架が立っている。

「この十字架の門を通って行く者は救われる」

ということ。あの囲いの中は十字架で守られている。だから、

「それ十字架の言は^{ことば}止^{とど}ぶる者には愚^{おろか}なれど、救^{すく}わるる我らには神の能力^{ちから}なり」
（コリント前1・18）

十字架という事実が語りかけている言です。現実の十字架はもう消えてなくなっています。でも、霊の十字架は依然としてゴルゴタの丘に光輝いて立っている。そこから光を放っている。あの現実の十字架は血なまぐさい十字架でした。目を背けたくなるような十字架でした。けれども、私がイメージする十字架は黄金の十字架です。

「この十字架でお前たちの旧い罪も愆^{とが}も病^{やまい}も死も全部滅ぼした。今は輝く十字架が立っている。そこから生命が流れてくる、生命の泉だぞ。それをしっかりと受けとれ」
と。讃美歌に、

「十字架のかげに 泉わきて

いかなる罪も きよめつくす

おらせたまえ この身を主よ

十字架のかげに とこしえまで」（聖歌396「十字架のかげに」）

「神の御許に行くまでは十字架のもとにいつも居らせたまえ」

という讃美歌があります。だから、十字架という現実は観念ではない。それがもうあなたを全部担^{にな}いきっている。十字架があなたを担いきっている。いかなる罪も清めつくした。讃美歌で「清めたまえ」という讃美歌はきらいです。

「清めてしまった。だから、帰ってこい」

と言っている。

「清めたまえ、これから行くから清めたまえ」

なんていう、「功^{いさお}なきわれを」（讃美歌21番）というあの歌はダメです。

「清めたから、来い」

と言っている。

「はい、今、行きます。ハレルヤ、讃美します。聖霊をください」

と、それならわかるよ。そうでない、ちよつと変な讃美歌がときどきあります。あれはいただけませんよね。はは、余計なことを言つてすみません。



だから、十字架という言、見えないけれども今も立っているあの十字架を蹴飛ばすやつは愚かであり、そして蹴飛ばしたやつは地獄へ行く。けれども、それにすがる我々には、これは天国への門、生命の源である。

「録して、『われ智者の智慧をほろぼし、^さ慧き者のさときを空しうせん』とあればなり。²⁰智者いずこにか在る、学者いずこにか在る、この世の論者いずこにか在る、神は世の智慧をして愚ならしめ給えるにあらずや。²¹世は己の智慧をもて神を知らず（これ神の智慧に^{かな}適えるなり）この故に神は宣教の愚をもて、信ずる者を救うを善しとし給えり。」（コリント前1・19～21）

この世は自分の知恵では神を知らなかったという。たくさん学者がいますわ。私なんか学者の中で育ってきたから。そういう学者どもはなぜ、キリストの前に頭をさげないのだろうか、不思議でしょうがない。やはり、偉いんだな、自分たちが。

「俺は偉い」

と皆さん思っている。私なんかは「俺は偉い」なんて思ったことがないものね。

「俺みたいなアホがどうしてこんなところにおるんやろう」

と、いつも思っている。私はコンプレックスのかたまりでしたからね。そういうコンプレックスのかたまりをキリストが、

「お前はコンプレックスではあかんで」

と行って、どんどん地位を上げて行って、

「さあ、わかつたやろ、わかつたやろ」

と。「はっ、わかりました」と、そんなんですわ。

「世は、賢いひとは自分の知恵でもって、神さまがわからなかった。これは神さまの知恵になっっている」

とちゃんと書いてある。クリスチャンだからといってバカにされたら、誇つたらいい。

「私はアホでバカです。でも、キリストは凄いですよ。こんなバカをあなた方より賢い人間にしてくれた」

と。そのくらいのプライドを持つていいんですね。

「²²ユダヤ人は^{しるし}徴を請い、ギリシヤ人は^こ智慧を求む。²³されど我らは十字架に釘けられ給いしキリストを^{のべつた}宣伝う」（コリント前1・22）

十字架のキリストです。十字架をぬきにしたらダメですよ。今の教会に本当に十字架が立っているか。私は他の教会のことはあまりわかりません。せいぜい、キリスト新聞を読むくらいです。全然出てこないですね、そういうことは一切。「聖霊」となつたらもつと出てこない。もうこの世的なことばっかりです。せいぜい慈善活動、そういうことには一生懸命です。そこで止まっています。この面はどこから出てくるかは、全然出てこない。だったら、この世の慈善団体と同じですよ。



●「十字架と聖霊」がワンセット

だから、いかに十字架の言ことば、十字架という事実が、永遠に語り続けてくれている十字架の言が大事であり、しかも十字架だけではダメで、聖霊というものと結びつかなければダメなんです。十字架でゼロにされたところに聖霊という力ある聖なる霊が宿ってくれる。十字架と聖霊がワンセット。これが小池辰雄の福音です。そこをしつかりつかめば、それでいい。十字架を土台とした聖霊。十字架を通して流れてくる霊。この中に生きなさいと。「ワッショイ、ワッショイ」と祈ったら、どんな霊でもやってくる。本当にそうなんです。霊の世界というのは非常に複雑らしい。私はあまり知らないけれど。本気で祈れば、いろんな霊が流れてくるそうです。だから、ヨハネの手紙の中に、キリストの霊とそうでない霊を見分ける見分け方が書いてあるでしょ。

「イエスが肉体をとって来られたということを告白する霊はまともな霊だけれども、そうでない霊は信じてはいかん」

とか、そういうことがちゃんと書かれています。グノーシス派とかいろんな派があったようです、あの時代に。私たちはこの福音書とパウロの手紙、この聖書を立体的にしっかりと受けとっていけば、多くの本を読む必要はない。

それこそ「からだで読め」と小池先生は言われた。日蓮の言葉です、「頭で法華経を読んでいるやつはたくさんいる。お前は身体からだで読め」

と、島流しにあう別れに際して、そういうふうな弟子に言ったそうです。それで、からだで読むという「身読しんどく」という言葉が出てきた。小池先生はどう言われたか。

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり。皆さん、驚いていますか。驚かなかつたらウソですよ」

とよく言われた。キリストのやっておられることを、自分の目の前で展開しているのを見たら、

「ギョギョッ！ エーッ、そんなことありですか！」

というのが当たり前ではないですか。五つのパンと二匹の魚で、五千人いようが養われている。

波の向こうにボートと人影が見えてきた。イエスが湖の上を踏みしめてやって来た。

「ヘエーッ、先生ですか！ そっちへ行かしてください！」

と、ペテロは水の上を数歩あるいたら沈みかかった。ああいうのを本当に私は、

「ウワッ、すごい、すごい、すごい！」

と、そういう気持ちで読みます。ペテロも凄いなと思いますよ。イエスが、

「来い！」

と言ったら、彼は行ったもの。五、六歩あるいたんですよ。そして風と波をみて、「あれ？ 俺のやっているのは何だ」



と思ったと勝手に沈んだ。ということは、イエスだけを見ていけば沈まなかったんです。イエスだけを見ていけば、その吸引力が、イエスの引きつける力というのが水の上を歩かせた。ところが、イエスから目を背けたら、その力が消えた。そしたら沈んだ。我々の信仰だつて、イエス・キリストから引つ張られていての間はいい。イエス・キリストから引つ張られているところから外れたら、ブクブク沈む。それは当たり前のことですよ。だから、クリスチャンというのはいつても危機的状況なんです。向こうの世界に行けばもう大丈夫です。でも、地上はさまざまな誘惑、霊の惑わし、いろんなものが渦巻いている。ですから、

「たえず十字架を根底にして深く祈りなさい」

と小池先生は言われる。「深く祈りなさい」とは、

「十字架の中に深く入りこみなさい」

ということだと思う。

小池先生が言われた福音で素晴らしいのは、十字架・聖霊がワンセットだからいい。「十字架、十字架」といつている教会で聖霊が言われなかったり、「聖霊、聖霊」といつて「ワツシヨイ、ワツシヨイ」祈っているけれど、十字架がふつとんでいるようなものがあるけれども。小池辰雄の福音の健全さは、十字架・聖霊がワンセット。そこから常にスタートしなさいということ。

キリストの言もそうでしょ。

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、

生命なり」(ヨハネ6・63)

と。ヨハネ伝6章63節です。ヨハネ伝の3章と6章は大事です。6章は繰り返し読んでいただいていい。6章で何とキリストは言っておられるか。

「我を喰らえ、我を飲め」

と、もうくどいほど言っておられます。

「我は天より降りし活けるパンなり。モーセが与えたパンを食べたのに、みな

死んでしまった。でも、私というパンを食べる者はいつまでも死なない」

と、繰り返し言っておられる。

●聖書をカラフルにお化粧

それから、皆さんに——またこれはお節介でお伝えしますけれども——聖書をカラフルにしてください。自ずと大事なところには赤線を引かざるをえない。赤線だけですまなかつたら、マーカーで色を塗らざるをえない。囲いこみをしないではいられない。そんなふうにお化粧をしたくなってくるんですよ、大事なところは。そうしたら、お化粧のところだけ拾い読みしていったら、大事なところは全部読めてしまうわけです。真っ白な聖書な



んで恥ずかしいですよ。私はそれを「お化粧」と言っている。聖書をお化粧してほしいと願っています。人それぞれのお化粧の仕方があります。キリストは、

「我をくらい、我を飲め」

と言われた。つまり、

「私と一つになれ」

ということ。

「我は天よりくだりし活けるパンなり。モーセはパンを与えた。しかし、あのパンを食べた者はみな死んでしまった。しかし、私というパンを食べる者は永遠に死なない」（マタイ6・51）と、繰り返し繰り返し6章で言っておられる。

6章の始めでパンの奇蹟をされた。そのあとで出てきている箇所ですよ。人々はパンの奇蹟を求めて——五つのパンと二匹の魚で五千人にパンを食べさせられた——それで人々は、この人を捕まえておけば安心だというわけで、追いかけてきた。それが6章ですよ。6章の始めから見ますと、

「³イエス山に登りて、弟子たちと共にそこに坐し給う。⁴時はユダヤ人の祭なる過越^{すきこし}に近し。⁵ピリポに言い給う『われら何処^{いずこ}よりパンを買いて、此の人々に食わすべきか』⁶かく言い給うはピリポを試むるために、自ら為^なさんとする事を知り給うなり。⁷ピリポ答えて言う『二百デナリのパンありとも、人々すこしずつ受くるになお足らじ』」

「1デナリ」というのは一日の労賃だといわれている。もし1万円と換算すると、200万円ということになる。要するに200デナリのパンを買ってきたって、これだけの大群衆の前には役に立ちませんよと言った。

⁸弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う⁹『ここに一人の童子^{わらわ}あり、大麦のパン五つと小さき肴^{さかな}二つとをもてり、されど此の多くの人には何にかならん』¹⁰イエス言いたもう『人々を坐せしめよ』その処に多くの草ありて人々坐せしが、その数おおよそ五千人なりき。¹¹ここにイエス、パンを取りて謝し、坐したる人々に分ちあたえ、また肴^{さかな}をも然^{しか}なして、その欲するほど与え給う。

感謝し、神さまに感謝の祈りを捧げて、人々に分かち与えた。お魚についてもやはり先ず感謝して天に捧げて、その感謝の祈りをしたのちにお魚を分け与えられた。

¹²人々の飽きたるのち弟子たちに言いたもう『¹³乃ち集めたるに、五つの大麦のパンの擘きたる余^{あま}をあつめよ』¹⁴乃ち集めたるに、五つの大麦のパンの擘きたるを食しもの余、十二の筐^{かご}に満ちたり。¹⁵人々その為し給いし徴^{しるし}を見ていう『¹⁶実にこれは世^よに来るべき預言者なり』¹⁷イエス彼らが来りて己をとらえ、王とな



さんとするを知り、復またひとりにて山に遁のがれたもう。

彼らは、この人を捕まえておけば、もうパン問題は解決する。食糧問題は解決する。だから、この人を捕まえて王様にしようという。イエスが徴として何をなさっているか、そんなことを思いめぐらしている者はひとりも居らんという。こういう情けないことだった。だから、イエスは逃げて行かれた。

弟子たちは、先に船を漕いで沖の方へ出て行つた。

16 夕になりて弟子たち海にくんだり、17 船にのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまわず。18 大風ふきて海

ややに荒出づ」（ヨハネ6・3～17）

始め静かな湖が荒れてきた。弟子たちは行くに行かれず戻るに戻れず、湖の上で困っていた。そこへイエスは波を踏みしめて歩いて行かれた。こういう場面を創造するだけでも、

「凄い！ 素晴らしいな！」

と驚く。ところが、学者はわからない。学者は、

「こんなのは神話だ、こんなのはウソだ」

と言ったり、簡単に否定する。また、「これは復活されたキリストの姿だ」なんて言う。なんでそんなふう読み替えなければいかんのかと私は言いたい。イエスほどの方は祈れば霊化するひとです。霊化されたキリストは、海の上であろうと何であろうと歩んでくるのは当たり前ではないですか。それを、

「あれは復活されたキリストに出会った弟子があんなふうな書き方をしている」

と、わざわざ作りかえる。学者にならん方がいいですよ、皆さん。幼児おさなでいい。マタイ伝では11章25節に出てきます。

●御言を自ら流に受けとる

「その時イエス答えて言いたもう」

とある。小池先生は、

「何にイエスは答えたんですか。天からの声にだよ」

と言われた。骨折り損のくたびれ儲け。イエスといえども、がっかりして落ち込んでいたら、天から声がきて、

「嘆くな、それでいいんだよ」

と。御声はこのルカ伝と同じです。ルカ伝10章21節、

「21 その時イエス聖霊により喜びて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、

此等のことをかしこ智きものさと慧き者にみどり隠して、あつわ嬰兒におさな顕したまえり。

「智きもの慧き者」、要するに頭のいい人たち、そういうこの世の知者には隠して、嬰兒、乳飲み子に天国の真理を顕してくださった。これこそあなたの御意にかなうことでしたと、



キリストは祈ってくれている。

父よ、然り、此のごときは御意に適えるなり。22 凡ての物は我わが父より委ねられたり。子の誰なるを知る者は、父の外になく、父の誰なるを知る者は、

子また子の欲するままに顕すところの者の外になし』（ルカ10・21～22）

子つまり自分のことを誰かと知っているのは父なる神しかない。父がどういってお方かということも——「子また子の欲するままに顕すところの者」とは、イエスと、イエスがご自分をあらわして弟子にしてくれた我々です——そういうものしか知らない。そういうことを言われた。それから、マタイ伝ではこのあとに、

「すべて労する者・重荷を負う者、われにきたれ」

というのが続いていく。ルカ伝ではまた別のことがあります。

「あなた方が見ている霊的な現実には凄いいんだ、預言者だつて誰だつて見ることはできなかつたんだよ」

ということが書かれている。

「23 かくて弟子たちを顧み竊に言い給う『なんじらの見る所を見る眼は幸福な

り。24 われ汝らに告ぐ、多くの預言者も、王も、汝らの見るところを見んと

欲したれと見ず、汝らの聞く所を聞かんと欲したれと聞かざりき』（ルカ

10・23～24）

だから、

「あなた方は凄いいものを見て、凄いいものを聞かされている。喜べ、喜べ」

と。こういう励まし言葉が我々に語られている。そういうものに触れたら、うれしくならませんか、皆さん。

私は、「聖書を読む」というのはそういうことだと思っています。キリストが御言となつてこつちに掴みかかつてきて、

「お前は、骨折り損のくたびれ儲けと思って、今日はガツカリしているかも知らんけれども、心配するな。俺の方が

イエスはご自分のことを私には「俺」と仰ってくださいます、

俺の方が何倍かガツカリしたりしたんだよ。その時に神さまから慰めの御声がかつてきた。それが福音書に残っている。お前はガツカリすることはない。俺はお前の心をよくわかっているよ」

と、そんなふうに、つまり、自己流に受けとっている。ええ、それでいいのではないですか。イエスは私たちと一つになろうとしてくださいっているんですよ。イエスは我々に決して「聖人君子になれ」なんて言っておられない。

「普通の人間でいいよ。疲れていい。疲れたら、ぶつたおれたらいい。『すべて労する者・重荷を負う者われにきたれ。我なんじを休ません』と言っているのではな



いか。さあ、来なさい。来て休んだら力を得る。そしたら、立ち上がるよ」
と。私は京都キリスト召団に、

「鴨川温泉キリストの湯」

という別名を付けている。そばに鴨川が流れている。「鴨川温泉キリストの湯」と。疲れた人はそこへ来て、鋭気を養って、そしてまた力をいただいて、聖霊の力をいただいて、また旅立つてくださいと。そしたら、意地のわるい人が質問して、「混浴ですか？」と（笑）。考えたこともなかった。「君はそれを欲するか？」と聞いてやりたかったけど。

こんなお話をしますと、私は日常生活そのものがキリストと、聖書と一つの生活をしているという、そのままいわば証なんです。私みたいに一人住まいをしていると、話し相手がない。特に夜なんて——電話ももちろん話す人はいませんし——独りぼっちでしょ。だいたい、私は夜型だから。ちよつと徳利にお酒を温めて、ほつくらできるからね。そして聖書を読んで、しばらく一時間くらい、まあ黙想の時間かな、それをやっていたら、いい気分になってコロツと寝るわけです。それが私のキリストと共なる生活です。スピリットなんです、お酒は（笑）。たしなむくらいはいいんですよ。厳格な派は禁酒禁煙ですからね、もうやりきれんわ。禁煙は私は賛成です。あれの害悪は凄いものだから、国家財政からしても。禁煙はいいけれども、でも、禁酒は困ります。「禁酒」の「禁」は、僅かわずの方の「僅酒」にしてほしいな（笑）。

●「見えるもの」と「見えないもの」

もうひとつ、今日の申し上げたいことで、「見えるもの」と「見えないもの」ということ。さっきのコリント後書の4章の、

「¹⁸我らの顧かへりみる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時しばらくにして、見えぬものは永遠とこしえに至るなり」（コリント後4・18）

とありました。

「我々に見えるものではなく、見えないものに目を注ぎ、見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くなり」

と。その次の5章にいくと、天国のこと、死後の世界のことを書かれている。死後の我々はちゃんとした霊体をいただくということを言っている。

あのコリント後書4章の終わりのところがひとつの大事なポイントです。それから、さっきのコロサイ書

「あなた方は既に死にたるものにして、あなた方の生命はキリストの中に隠されてある」（コロサイ3・3）

と。それから、コリント後書の5章に、

「¹³我等もし心狂えるならば、神の為なり、心慥たしかならば、汝らの為なり。」



14キリストの愛われらに迫れり。」（コリント後5・13～14）
「キリストの愛われらに迫れり」とあります。さつき、伝道というお話がありました。弘野さんは、

「語らないではいられない。じつとしていられない。こんな宝を自分の中に貯めておくのはもつたいたい。何とかしてこの宝を人々に与えたい。そういう衝動にかけられる」

と、仰いました。それなんですね。世間でもそうでしょう。

「この料理はめっちゃおいしかった。しかもあまり高くなかった。今度行こう」とか言って連れていく。

「ああそうやな。あんたの言うことほんまや」

と、ひとりでに宣伝してまわる。素晴らしいものが見つかったら、なにかそれを人に伝えたいという衝動がどうも働くそうですよ、ご馳走の世界では。

「あつ、この美容院はいい。美人になるよ」

「そんなら行こうか」

とか。自分を喜ばしてくるもの、美しくしてくれるもの、そういうものにぶつかったら、それを人にも分かち与えたいという衝動がどうも働きそうです。そうしたら、我々はキリストという宝を自分の中に閉じ込めておくようなことはできない。これを伝えたいではないらしいという衝動が働く。それをパウロがここで言っている。

「13我等もし心狂えるならば、神の為なり、心慥ならば、汝らの為なり。」

14キリストの愛われらに迫れり。我ら思うに、一人すべての人に代りて死にたれば、凡ての人すでに死にたるなり。15その凡ての人に代りて死に給いしは、生ける人の最早おのれの為に生きず、己に代り死にて甦えり給いし者のため

に、生きん為なり」（コリント後5・13～15）
一人のお方がすべての人に代わって死んでくださったとすれば、そのすべての人、一人ひとりが既に死んだ。今度は、生きている人は、死んでいただいた我々一人ひとりはおも、自分のために生きるのではない。自分のために身を犠牲にして死んでくださった、しかも、復活の生命を与えてくださるお方のために生きる、ご恩返しで生きる。

よく、私の妻のおばあちゃんが、「報恩講、報恩講」と言っていました。仏さまのご恩に報いる、そういうような講です。

だからここでも、私たちのために生命を献げて——ご自分は祈っていれば眩まぼゆくなって天に昇っていく、そういうキリストがわざわざ私たち一人ひとりのために己が生命を献げて——こつちのマイナスを全部引き受けて、そして私たちには生命をくださる。そういうお方のために何かこつちはしたい。ご恩に報いたい。これはもう当たり前ではないですか。もはや自分のためには生きない。自分のために代わって死んでくださったのみならず、甦つ



てくださったお方のためにこの身を献げて生きたい。これはナチュラルではないですか。

「¹⁶されば今より後われ肉によりて人を知るまじ、^{かつ}曾て肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯くの如くに知ることをせじ。

「^{かつ}曾て肉によりて」というのは、うわべの見かけで知っていたけれども、今はそういう知り方はしないと。

¹⁷人もしキリストに在らば^{あらた}新に造られたる者なり、

キリストの中に創りだされた、そういう新しい人、それは新しい創造物、新創造物である。誰でもキリストに在らば新たに造られたる者なりと。

古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり。¹⁸これらの事はみな神より出づ」
（コリント後5・16～18）

●生命の御霊の法

こここの箇所とローマ書8章のところが一致しています。表現はちがいますが、表現はちがいますが、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。

キリスト・イエスの中に在らしめられて在る者——「在らしめられて在る」というのは小池辰雄の読み方で、ひとりで在るのではない、在らしめられて在るんですよ——はもはや断罪されることはない。なぜなら、

²キリスト・イエスに在る^{いのち}生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より^{とき}解放したればなり。

キリスト・イエスの中に働いているあの生命の御霊の法則があなた方を、今まであなた方を縛りつけていた罪と死の法則から既に解き放つたのである。⁵節、

⁵肉にしたがう者は肉の事をおもい、これは^{ふる}旧い我々です。

霊にしたがう者は霊の事をおもう。

ところが、我々は霊に従って思えなかつた。

⁶肉の念は死なり、

自己中心の思いです。「肉の念」とは自己中心の思い。これは死をもたらす。

霊の念は^{いのち}生命なり、平安なり。

「霊の念」とは神中心。神さまに視点を移し変えた、神さまの目にあつて物を見ると、神さまに^{いだ}抱かれて生きるという生き方、在り方。これは生命なり、平安なりと。ハッキリしているでしょ。

⁷肉の念は神に逆う、それは神の律法に^{おきて}服わす、否したがうこと^{あた}能わす、

⁸また肉に居る者は神を悦ばすこと^{あた}能わざるなり。⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで^{あた}霊に居らん、



肉の念は神に逆う。それは神の法則に従えない、神の法に従えない。いや、従うことは不可能である。また、もしも依然として肉に居る者がいるとしたら、その人は神さまを悦ばずなんて、神に喜んでいただくなんて無理だ。けれども、もしも、あなたの方の中に神さまの御霊が宿っていらつしやれば、あなた方はもう肉の人ではない。霊の人であると。

「神の御霊があなたの方の中に宿っていらつしやる以上は」

と、こう読んでほしい。これは「もしもそうならば」という仮定法だけれども、「もしも」どころではない。もう十字架で贖われて聖霊をいただいた。それだったら、あなた方はもはや肉の人ではなくて、霊の人である。そして、

「キリストの御霊を^{みたま}いただいたくない人間はキリスト者ではない」と、ハッキリここで言っている。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹⁰若しキリスト汝らに在^{いま}さば、^{からだ}体は罪によりて死にたる者なれど、^霊霊は義によりて生命^{いのち}に在らん。

キリストの御霊があなたの中に生きていてくださるならば——身体は罪の故に死にます、必ず人間は死にます、葬られます——けれども、霊はもう既に生命の中にある。神さまの中に抱きとられてある。義にある。義によつて生命にある。

¹¹若しイエスを死人の中より甦^{よみが}えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦^{よみが}えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて、汝らの死ぬべき^{からだ}体をも活かし給わん」（ロマ8・11）

イエスを死人の中から甦えらせた方の御霊があなたの中に宿っておられたら、この御霊によつて死ぬべき身体をも活かしたもうよと。

これは本当だと思う。もしも私がキリストを知らなかったら、今まで生きていくかどうか分かりませんね。小池先生だって、あのキリストによつて92歳まで行かれたと思う。もつともつといつてほしかったですけれども、先生は

「百までいくよ」

と言っておられたから。でも、ハッキリ小池先生もキリストの御霊によつてあのような長寿を全うしていかれたと思います。

●福音は得心させてくれる世界

パウロがここで言ってくれていることは、ナチュラル（自然な）な霊の法則を言っている。霊界の法則を言っている。それが解^{わか}らないから、不思議なことを言っているとか、そういうように映るだけで、地上の法則があれば、霊界の法則があるはずでしょ。キリストは霊界の法則を引っさげて来てくださった。だから、普通の人が受けとれないのは当たり前なんです。それをイエスは、



「ひと新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。ひとは上から生まれなければ、神の国に入ることができない」

と言いました。ヨハネ伝3章。だから、ナチュラルなんです。

「肉から生まれた者は肉である。霊から生まれた者は霊である。ニコデモさん、あんた、こんなことが解らないの」

と、不思議に思っ言っているんですよ、イエスの方は。イエスのところにニコデモがやって来た。

「あなたはイスラエルの先生だろ。イスラエルの先生でいながら、こんな初歩的なことがわからないの？」

「ひと新たに生まれずばとは、お母さんの中にもう一回入るんですか？」

と。だからさっきの、

「これらのことを賢き者、^{さとし}聡き者に隠して、^{みどりご}嬰兒に顕し給えり」（ルカ10・21）

というのはそういうことなんです。ニコデモさんみたいな大学者がわからない。それを我々みたいなバカ者にちゃんと、

「ああ、その通りですよ。それ以外にありませんよ」

と得心^{とくしん}させてくれる。私は、福音の世界は得心させてくれる世界だと思う。知らない、わからないことを無茶苦茶信じるなんて、そんなことではない。

「なるほど、それ以外にはありませんよね」

という、納得の世界です、私にとつては。

「³イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること^{あた}能わず』⁴ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争^いで生まるる事を得んや、再び母の胎^{たい}に入りて生まるることを得んや』⁵イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能わず、⁶肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。』

これです。肉によってみんな生まれている。霊によって誕生しないと、霊の次元には行けない。どんな神学者であろうと、牧師さんであろうと、クリスチャンであろうと、肉の次元に留まっているクリスチャンは天国には入れない。そこで霊によって生まれなければ。

「では、どうやって霊によって生まれるのか」

ということになりますね、次は。

⁷なんじら新^{あらた}に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。

「肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり」と。新たに生まれなさいといったって、別に不思議に思うことはないよと。

⁸風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処^{いずこ}より来り何処へ往



くを知らず。すべて霊によりて生まるる者も斯くのごとし』

「新たに生まれる、天から生まれる、上から生まれる」とはそういうことだよと。

9 ニコデモ答えて言う『いかで斯かる事どものあり得べき』¹⁰ イエス答えて言
い給う『なんじはイスラエルの師にして、猶かかる事どもを知らぬか。
¹¹ 誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを証す、然る
に汝らその証を受けず。』¹² われ地のことを言うに汝ら信ぜずば、天のことを
言わんには争で信ぜんや。

ニコデモは、

「どうして、そんなことがありうるんでしょうか？」

と、ますます混乱しています。イエスはけろつとして、

「あなたはイスラエルの先生だろ。でも、こんな初歩的なこともわからないの？地
上のことはいっぱいわかつている。でも天上のことは、あんた、何も知らないね。
私は自分の知っている、自分の味わった世界、自分の居たところ、そのことを地
上にくだってきて、そのまましゃべっているだけだ。ところが、あなた方は全然
受けとらない。まるで水と油のようになってる。しょうがないね」

¹³ 天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。

その次が大変ですよ。

¹⁴ モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。

これは十字架ですよ。「ヨハネ伝に十字架がない」なんて言う人は大間違い。ここにもちや
んと十字架が示されている。

¹⁵ すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』¹⁶ それ神はその独子
を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生
命を得んためなり。

十字架は隠されています。でも、十字架なくしては、聖霊も生命も来ません。

「光が世に来たのに、人は自分の行いが悪いから、光を避けて闇を選んでいく。そ
れが審きになっている」

ということをその先に言っています。

¹⁹ その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為の悪しきによりて、
光よりも暗黒を愛したり。²⁰ すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、
その行為の責められざらん為なり。²¹ 真をおこなう者は光にきたる、その行
為の神によりて行いたることの顕れん為なり。」（ヨハネ3・3～21）

光に来たら、自分のやばいわざが顕れるからね。ところが、「まことを行う者は光に来る」
という。いやこれは逆に、



「光に來た者がまことを行おうようになる。イエス・キリストという真の光を浴びたら、その人は真の行為をすることができるようになる。導いていただけから」と読む。それから、31節から。これは本当にこの通りですよ。

「31上より来るものは凡ての物の上すべにあり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。天より来るものは凡ての物の上すべにあり。32彼その見しところ聞きしところを証したもうに、誰もその証あかしを受けず。33その証を受くる者は、印して神を真まことなりとす。」

イエスはその天上のことを自分で体験したままに、見たこと聞いたことを全部それをそのまま語っているのに、地上の人間は誰も信用しない。そのくらい水と油だよということが書かれている。しかし、それを

「はい、その通りです」
と受けとつた者は神さまを受けとつたことになる。

34 神の遣つかし給たまいし者は神の言をかたる。神、御靈みたまを賜たまいて量はかりなければなり。

これはキリストのことだというより、皆さん一人びとりのことですよ。皆さんが証人となつてキリストを伝えるということはこれなんです。神の遣つかわし給たまいし者として証人とされているんですから、自分の勝手な肉の思いでキリスト宣伝しているのではない。人あかしに証するということは、キリストのお遣つかいとして証するんです。

福音書の中でもキリストは十二弟子を集めて伝道につかわされる場合と、七十人を選んで二人ペアにして伝道に行かせる場合と、二つの場合があります。その時は、こと細かに指示を与えています。

「こういう場合にはこうしなさい、ああしなさい」

と。それは送り出すときには、送り出す源の主人はしっかり知恵を与え、力を与え、必要なものを全部分かち与えて、そして送り出す。我々は世に送り出されている。ということは、必要なものはすべて添えて与えられるんです。

「まず、神の国と神の義を求めたら、生きていくために必要な食べ物、飲み物、

一切のものが添えて与えられる」

とありますように、今度は、靈の戦いにおいても、私たちはキリストの靈をいただき、そしてキリストにすがっていけば、必要な靈的な能力、力を全部、キリストからいただく。自分の力ではないですから。そういうふうに受けとつてほしい。

「神の遣つかし給たまいし者は神の言をかたる。神、御靈みたまを賜たまいて量はかりなければなり」

と。これが皆さん一人びとりですよ。皆さんがキリストに遣つかわされて僕しもべとして証すること、このように神に遣つかわされた、キリストに遣つかわされたものとして皆さんはキリストのことを、神さまのことを証する。そして、上から応援がやってくる。援軍がやってくる。

「神、御靈を賜たまいて量はかりなければなり」



とあります。小池先生は、

「私は、地上では無教会の人たちからみんなそっぽを向かれた。しかし、天の万軍が私の味方をしている」

とよく仰いました。

³⁵父は御子^{みこ}を愛し、万物をその手に委ね^{ゆた}給えり。³⁶御子を信する者は永遠の生命^{いのち}をもち、御子に従^{したが}わぬ者は生命を見ず、反^{かえ}って神の怒^{いかり}その上に止^{とど}まるなり」

（ヨハネ3・31～36）

キリストを蹴飛ばしている人間は、自分で自分を滅びに定める。これを自業自得といいます。

●人間は蒔いた種を刈り取る

この世の中で大事なことはひとつは、

「人間は蒔^まいた種を刈り取る」

というのは真理です。自分で変な種を蒔きながら、キリストに刈り取らせたら申し訳ない。まず自分で刈り取りなさいと。人間は蒔いた種を刈り取る。因果応報という言葉があります。原因と結果。そういうことをクリスチャンで曖昧にする人が時々あります。自分が変な種を蒔きながら、つけは全部キリストに負わせて、自分は涼しい顔して、

「自分は十字架で贖^{あがな}われます」

なんていって、ふんぞりかえっていたら、これはおかしい。まず自分が蒔いた種は自分で刈り取らなければダメです。でも、

「刈り取れません。主さま、助けてください」

と祈ったら、

「いいよ、いいよ。私が後始末をやってやるから」

と。私はそういう気持ちですね。自分が蒔いた種のつけをキリストにいきなり付けて、自分にはノホホンとしている。こんなのは私は受け入れることはできません。私の福音はそんなのではない。皆さんはどういうふうにお受けとりになるかしらなければいけません。

刑法の世界でもやはり、責任ということを重ねる。責任能力のない人は無罪、罪に定められない。負う力がないのだから、判断力がないのだからパスになる。けれども、負う力がある人、判断力があるにもかかわらずあえて罪を犯したから、責任をとってくれという、責任主体なんです。我々も本来、責任主体なんです。

けれども、「責任がとれません」と言って、キリストに泣きついたんです、私は。自己責任だけでも、

「責任とれません。助けてください」

「よし、わしが引き受けた」

といつて、キリストが引き受けてくださった。そしてキリストは新しく私を創り変えて、



「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」（ガラテヤ 2・20）

「汝らは既に死にたる者にして、その生命はキリストの中に、神の中に隠されてある」（コロサイ3・3）

と。ああいうパウロが言っていることは全部、私にとってリアリティ（現実感、真実性）です。目に見えないけれども、霊的リアリティです。それを生きている。それが私にとっての、「聖書を生きる、キリストを生きる」という生活そのものなんです。ですから、私にとっては、生活実態を離れて聖書もキリストもない。非常にプラクティカル（実際の）な人間なんです。私は。法律学の方では、理論法学とかいわれているようですが、自分でもそう思ってきたけれども。でも、福音においてはプラクティカルなんです、実務家、実生活者なんです。浮わつたのはいやです。

●寝ても覚めても神讚美

「泥を被^{かぶ}って生きる、泥んこになって生きる」という。それで素晴らしいではありませんか。その中にこそキリストが働いてくださる。私はそう思う。生の^{なま}、どうにも自分の力でもできない、寝るのも疲れて眠れないという、そういう中にこそキリストの力が働く。私はそう思っています。泥んこの中にキリストは生きてくださっている。だから、神讚美。寝ても覚めても神讚美。それが私の理想とする世界です。現実はなかなかそうはいきませんでしょうけれども、私は神讚美、いかなる時にも主を讚^{たた}える。詩篇103篇です。

「わが魂よ、主を讚^ほめよ。わが五臓六腑よ、主を讚^ほめまつれ」

その理由はちやんと、

「神は私のすべての咎^{とが}を赦^{ゆる}し、生命を墓^{あがな}より贖^{あがな}い出し」

と。あれは本当に福音をしつかり先取りして語ってくれていますよ。

「^{たましひ}わが靈魂よ主をほめまつれ。わが衷^{うち}なるすべてのものよそのきよき名^{みな}をほめまつれ。²わがたましいよ主を讚^ほめまつれ。そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ。

「すべての恩恵」です。「すべて」というのは、「オール」というのと、「エブリ」という二つがある。「すべて」は漢字で書くと、「オール」は「全」と、「エブリ」は一つ一つという「凡」と書く。「オール」というのはひつくるめて捕まえているのが「オール」ですが、「エブリ」というのは一つ一つを捕まえている。私は「エブリ」の方が好きです。一つ一つの恵み、御業。

「ああ、あの時、助けてもらった。あの時、慈しみ深い主に救われた」

と、一つひとつの恵みを忘れるなかれと。根源的には、あなたのすべての不義をゆるし、

³主はなんじがすべての不義をゆるし汝のすべての疾^{やまい}をいやし。



という。小池先生は言われた、

「癌であといくばくもないと医者に言われても、あるいはやせ細ってカマボコみたいにベッドにくくり付けられていても、霊は生きていますよ、根源的な生命は生きています。この『すべての病をいやし』を受けとってください。見えるところではない。見えないところでああなたは癒されている。御言を受けるとはそういうことですよ」

とハッキリ言われた。

「我々は見えるものではなくて、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的で、見えないものは永遠に続くからである」（コリント後4・18）

と。イエスという、肉体のイエスは消えました。けれども、霊体となつて復活してなお生きてくださっているイエスというお方、この方は代々永遠に我々と一緒に生きてくださる。しかし、見えない。見えないけれども、見えるごとくにその方を見つめながら、その方と一緒に歩んでいく。これが我々の生活でしょ。

主はなんじがすべての不義をゆるし汝のすべての疾をいやし。4 なんじの生命をほろびより贖いだし、仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ、5 なんじの口を嘉物にてあかしめたもう。

と。

「人は、生きるのはパンのみによるにあらず、神の口から出るひとつひとつの

言によつて生きる」（マタイ4・4）

「我をくらえ、我を飲め。私は生命のパンである。私を食べ、私を飲む者は永遠の生命を持つ」

と。ヨハネ伝6章に繰り返し言われている。そのことですね。

5 なんじの口を嘉物にてあかしめたもう。斯てなんじは壮ぎて驚のごとく新になるなり」（詩篇103・1～5）

「驚のごとくに新たにならざるをえないでしょ。どんなに肉体が病んでいても、看護ベッドにくくり付けられていても、魂は躍っていますよ、魂は天界を駆け回っていますよ」

という。

「旅に病んで夢は枯れ野を駆けめぐる」

とは、芭蕉の最期の句です。私たちはたとえ、どういう肉体的な状況が訪れようと、霊はキリストにあつて贖われて天界を駆けめぐっています。そしてやがて、キリストに光の国へ連れていただく。そこで主さまと抱き抱かれるという、そういう素晴らしい場面が待っている。そういう希望をリアリティとして生きているのがクリスチャンではないでしょうか。「聖書を生きる、キリストを生きる」というのはそういう生き方だと私は思います。



私は年齢的にこの中で皆さんよりいちばん向こうに近い。80代の方はいらつしやる？ あつ、いらつしやる。おお、わが仲間。私は今、86歳ですから。1932年生まれです。

私たちがこの「聖書を生きる、キリストを生きる」というのは、頭ではない。

「生活そのものが『聖書を生きる、キリストを生きる』という生き方をしてます」

という告白であつてほしい。それが自おのずと周囲まわりの人にも伝わっていくかもしれない。わがざわざ宣伝するとか、そういうことをしなくてもいい。

「あの人は、なんかいつもニコニコしているな。あの人はいつも先に『おはようございませう』と声かけてくれるしな」

なんて。私は割に人に声をかけるのが好きで、よく挨拶します。挨拶していやがる人はいないですよ。

「今日はいいお天気で結構ですね」

と。天気のことを言ったら誰も傷つかない。

「こんにちは。いいお天気ですよですね」

とか。相手が生き活きしていたら、「ああ、お元気ですね」とか、できるだけ人が聞いて喜ぶようなことを言つてあげる。わるい感じはしません。

「ああ、お元気ですね。いやあ負けませうわ」

とか言つて。誉めてあげて嫌がる人は誰もいません。ウソを言つたらいけませんよ。やはり、人を喜ばすということはいいいことですね。お金がかかりませんし。

この詩篇103篇は、始めの出だしはそうでしょ。それから歴史のことが出てきます。それから、人間というのはいかに儂はかないかということが出てきます。この103篇は福音をしっかりと掌握している、イザヤ書の、第二、第三イザヤ書の縮図みたいな箇所です。

もう一度繰り返して言います。聖書はのんびんだらりとただ漫然と読むのではない。ポイントをしつかり捕まえて、ポイントを数珠じゆずつな繋ぎにしていく。ひとつのワンセットにする。そういうグループをつくつていく。それを小池先生流にいうならば、「有機体的に」とかよく仰います。オーガナイズ（組織、体系づける）する。キリストは、

「聖書は我につきて証するものなり」

と、旧約聖書を言われた。今度は私たちは、

「新約聖書は私のことを証している書である」

と言う。

「私は自己紹介しようとするとなかなか時間がかかるので、この新約聖書は私の自己紹介に代わるものです。一遍読んでみてください」

と言つたら、誰も来てくれへんな（笑）。来てくれたらうれしいな。

「あんたは聖書のここを読めばいい。よつしや、私がレッスンしてあげるから」
なんて言つて。



とにかく、人々の間にコミニケーションを図っていくことが大事です。このコミニケーションがなかったらダメです。これはもうあらゆるお年寄りとの関係でもすべてそうじゃないですか。小さい方との関係でも、人と人とのコミニケーション、触れあいというものが大切です。私は握手というのが大好きです。よく握手します。これはヨーロッパにいた経験もあるけれども、まず握手する。向こうの人は握手だけでなく、ハグしてチュウしてくる。ドイツに留学していたときに、お爺さんはヒゲもじゃなんですよ、この柔肌にヒゲもじゃはないでしょ。でも、「ブルーダー、オクダ！」（兄弟、奥田！）とか言っただけでハグしてくる。そんなんですよ、向こうの人は。彼は非常に人懐っこい人でした。

●90歳まであと3年半

私は皆さんの中で最年長だけれども、霊においては本当に瑞々しいと同時に、向こうが近いということ。しかも、向こうに既に妻も往つていますし、翔ちゃんも往つてます。そうやって向こうとは非常に縁が深い。縁結びができてます。非常に終末が近いというか、そういう終末の迫り中で福音が語られている。私も人生の終末の迫りの中で人生を生きる。そのときに、何を遺して何を捨てていくかという、断捨離だんしゃりもやっていかなければいけません。遺された者が困らないようなことにしておいてあげないといけないと思っています。何がどこにしまつてあるか。何がどこにあるか。これは捨てる、あれは遺すとか。そういう指示書までやっておかないと。それを今から4年間でやりたいと思う。90歳までに。

90歳以上は考えていないです、私は。やはり、元気で生き生きと生きているのは90歳までと一応私は限定している。90歳になってまだ生き生きと生きていたら、そこからまた延長戦が始まる。一応私は90というのをひとつの限界ラインに置いている。あと3年半です。私は最高裁の勤務も3年半だった。3年半というのは緊張を保つていける。私の二倍やっている人は、「やはり、だらける」と言っていました、7年もやれば。3年半というのは緊張で終わります。だから、フルマラソンに対してはハーフマラソン、これは緊張で終わりますよ。皆さんもどうぞ、そういう緊張の中で自分で、まずは次の目標は何年後とか決めて、何年のちに何をやるという、そういう目標を立てて、「一年の計は元日にあり」といいますように、皆さんも、向こう3年の間にこれだけのことをやるとか、そういうことを一応、主にやってください。

ただし、私はそれについても注釈をつけておきたい。ヤコブ書です。ちよつと小池先生はその点、ヤコブ書を忘れておられたね、と私は思います。あの先生は百歳までの計画を立てられたけれど、百まで行かなかった。それはちゃんとヤコブ書に注釈がついている。もちろん、小池先生はよくわかっておられたと思いますよ。4章13節に、

「¹³聴け『われら今日もしくは明日それがしの町に往きて、一年の間かしこに留り、売買して利を得ん』と言う者よ、¹⁴汝らは明日のことを知らず、汝ら



の生命は何ぞ、暫く現れて遂に消ゆる霧なり。

明日をわからない身ではないか。そのくせに、一年間向こうへ行つてこうしてああしてと無条件に言うのは傲慢ではないか。慎みを忘れてはいかんよと。そういうことを言っている。

15 汝等その言うところに易えて『主の御意ならば、我ら生きて此のこと、或は彼のことを為さん』と言うべきなり。

これです。「御意ならば」というのが常に前提になっている。

「聖旨にかなうならばこれをさせてください」

と、そういう生き方でなければいけない。ところが、ヤコブの相手方に対しては、

16 されど今なんじらは高ぶりて誇る、斯くのごとき誇はみな悪しきなり。

高ぶつて誇っている。誇りはいかん。誇るなら主を誇れと。それから、更に恐ろしいことが書いてありますよ。不作為の罪ということ。作為、不作為、これは法律用語で、作為というのは「する」こと「ドゥー」。それから、不作為は「ノット・ドゥー」「しない」というさばり。これも罪だと書いてある。普通、人間は、

「何か悪いことをしたらいかん、何もしないでおきましょう」と、じつとしていいる。

「義を見てせざるは勇なきなり」

というが、人助けをしなければならぬ時に、しないというのは悪だよと。

17 人善を行うことを知りて、之を行わぬは罪なり。」

と書いてある。だから、これをまともに受けとつたら、

「やるのも罪、やらないのも罪。やったらへまをやる。やらなかったら、さばりと

いつて怒られる。どないしたらいいのか」

と。私は正直、そう思いました。生きてるのが辛かった。電車に乗って人にぶつかるでしよ。ああ何か怪我でもさせたのではないか。特に妊婦さんなんかがおられたら、あつ何か害を加えたのではないかと、ものすごく恐くなった。それから海辺でランニングをやっている、ビールビンの欠けらがいっぱい散乱している。あそこで花火なんかやったりするから。ああ、もし子どもが裸足で来て怪我をしたら、見過ごした私の罪だと思った。それからその次に袋を持つてまず掃除から始めた。全然、ランニングの楽しみが消えました。私はそういうふうになつてしまった。これも辛いです（笑）。そこをまた越えなければいけないんですけれども。

「人善を行うことを知りて、之を行わぬは罪なり」

と書いてあるでしょ。やるも地獄、やらざるも地獄。もう結局、キリストに全部お任せ。

「一切あなたにお任せしました。私はもう無責任を貫きます」

と、開き直るしかない。キリストは、



「任せておけ。私に任せておけ」
と。それで行ってます、私は。結局すべてはキリストなんです。十字架で全部背負っておられるんです。

「『われ主と共に十字架せられたり』と。もうお前ではない。生きてるのはお前ではない。お前が生きているような格好に見えているけど、そうじゃない。私が全責任を負っているから心配するな。お前がしくじったら、私のせいだ。お前が罪を犯したら、私のせいだ。お前は一切、無罪だ」

と。これが十字架ですわ。なにも十字架を隠れ蓑みのにして悪いことをしようとか、そんな魂胆は全くない。ないけれども、やってしくじる罪、やらない罪、いろいろありますから、そういうふうな形で責められたら、私はのがれようがない。けれども、キリストはそれを全部引き受けくださっている。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。復活のキリスト、御霊のキリストがわがうちに生き給うなり」

と。それが私のこの「聖書を生きる、キリストを生きる」という、そういう在り方です。日々の生活そのものです。そういう人間の願いとしては、困っている人、苦しんでいる人に何とかこのキリストの恵みを伝えたいなという。これは本能的に湧き上がってくる。そうせざるを得ませんという、そんな気持ちです。

それでは、これで終わることにします。

